

司書の職業像に関する研究：司書を主人公とした漫画の内容分析

A Study on the Professional Image of Librarians:
Content Analysis of Comic Book Featuring a Librarian

山口真奈*, 菅野育子**

Mana YAMAGUCHI, Ikuko SUGANO

要 旨

本研究は、司書という職業の専門性が認知されているか否かを明らかにすることを目的としている。まず、漫画において司書という職業がどのように描かれているかを明らかにするため、司書を主人公とする漫画作品を対象に、場面及びセリフとその登場人物を抽出して内容分析を行った。その結果、場面とセリフの全532件のうち、司書が行う「専門業務」が301件、司書としての専門性が求められない「非専門業務」が162件、「図書館員の意識」が53件、「図書館・図書館員の現状」が16件の計4つのカテゴリに分類することができた。また主人公について、専門業務であるレファレンスを担当する場面が多くあった一方、利用者と世間話をするといった接客のような業務も担当する場面が多く描かれていた。さらに、司書資格を有しない図書館員がレファレンスを担当する場面も描かれていた。このような専門業務と非専門業務との混在から、資格を有し、経験を積んだ司書の専門性が認知されない現状が明らかとなった。

キーワード：司書，専門職，職業像，漫画，内容分析

1. はじめに

1.1 図書館員という職業

日本の図書館において、図書館に働くすべての職員は「図書館員」と呼ばれる。まず、「図書館員」という言葉がどのように使われてきたのかについて述べる。「図書館員」が使われている代表的な例として、1980年に日本図書館協会が制定した「図書館員の倫理要綱」とその解説における記述が挙げられる。同要綱の解説では、「図書館員とは、図書館に働くすべての職員のこと」と明記されている（日本図書館協会，2014）。

上記の「図書館に働くすべての職員」という定義は、『図書館情報学用語辞典』の「図書館員」の項目においても、「図書館員の倫理要綱」を根拠に、図書館員に対する広義の解釈として採用されている。さらに、狭義では「図書館に勤務する専門的職員」と定められており、先の広義の解釈の背景には、利用者には専門的職員とそうでない職員との区別がつけられず、「図書館に働くすべての職員が同様の役割を果たすことが求められた」という事情がある（日本図書館情報学会用語辞典編集委員会，2020）。

* 愛知淑徳大学大学院文化創造研究科

** 愛知淑徳大学人間情報学部

1.2 図書館に勤務する専門的職員

上記で紹介した図書館員の狭義では、専門的職員という言葉が用いられている。ではこの専門的職員とはなにを意味するのであろうか。本節では図書館における業務をもとに、図書館員として専門性が求められる専門業務とは何かを確認する。

「図書館法」の第4条では、“図書館に置かれる専門的職員を司書及び司書補と称する。”と定められており、特に司書は“図書館の専門的事務に従事する。”とされている。つまり、専門的職員は司書と呼ばれ、司書資格を有した者を指す。文部科学省（2022）ホームページの「司書について」では、司書の主な職務を次の6つにまとめている。すなわち、①図書館資料の選択、発注及び受け入れ、②受け入れ、図書館資料の分類及び蔵書目録の作成、③目録からの検索、図書館資料の貸出及び返却、④図書館資料についてのレファレンスサービス、読書案内、⑤読書活動推進のための各種主催事業の企画、立案と実施、⑥自動車文庫による巡回等の館外奉仕活動の展開など、である。なお、①にある発注及び受け入れ、③の貸出及び返却については、それらを担当するのみであれば専門的職員である必要はないため、専門性を求められる職務とは言えない。

専門性が求められる業務には、上記の①であれば図書館に必要な資料を利用者ニーズに照らし合わせて選別できる、②資料の内容を表す用語（件名）や分類記号を見極める能力、③所蔵目録から利用者が求める資料を探し出す能力、④利用者が探し求める情報や資料を利用者に代わって探し出す能力、⑤利用者の読書支援を目的とした企画・立案・実施のための能力、⑥館外で専門業務を遂行するための能力、等を有する必要がある。

1.3 図書館員をとりまく現状

上記で挙げた能力を身に着けるために、大学においては司書課程科目が開講されており、条件を満たせば大学から司書資格の認定を受けることができる。そして、その時点で司書として専門業務を行うことができるものとされているが、図書館で実際に働く職員のうち司書資格を有している人の割合は半数を下回っている。文部科学省（2020）が行った社会教育調査では、図書館の職員全43,865人のうち、司書資格を有する人の割合は過去最高とはいえ、全体の49.1%（21,523人）であった。このように、図書館員という言葉の狭義であった「図書館に勤務する専門的職員」に当てはまらない職員が半数近くを占めていることから、「図書館に勤務するすべての職員」が図書館員であるとされるのは当然であろう。

1.4 司書という職業像に関する研究の必要性

葉師院（2016）による論文「専門職論と図書館員の現状」によれば、司書の専門性を高めるために議論が重ねられ、その専門性に対する“社会的認知を獲得すべく”、多くの取り組みがおこなわれてきた。しかし、それらの議論や取り組みは図書館員の労働者としての待遇を改善することとは別として扱わなければならないとしている。本研究も図書館員の雇用形態の問題を取り上げるのではなく、司書が専門職であるという認識がまだ少ない点に注目し、まずはその実態を明らかにする方法を検討したい。

本節の見出しにある「職業像」とは、世の中の人々がその職業をどのようなものであると受け取っているかを調べることから明らかにできるものである。

司書という職業がどのように受け取られているかを見ることから、司書は専門性を必要とする職業であると認められているのか、逆に認められていないのか、あるいは誤解されているのかをまず明らかにすることを本研究の目的として、司書の専門性に対する理解を高めるための議論を始めたい。

本研究では、「司書」という名称を、専門性を求められる業務を担当するものとして、「図書館員」という名称を図書館に働くすべての職員を意味し、図書館司書資格を有しているか否か、専門的なスキルを持っているか否か、そして正規職員か非正規職員かについては問わないものとする。

2. 職業像に関する先行研究

2.1 図書館員のイメージ調査

これまで、司書の職業像に関する研究は「図書館員のイメージに関する研究」ととどまっている。

山口真也（2000, 2001）は、1990年から2000年までに発表された漫画に登場する図書館または図書館員のイメージに関する調査結果を2つの論文で報告している。その前提として、図書館像に関する研究について、漫画というメディアはほとんど取り上げられてこなかったが、漫画は小説や映画よりもはるかに大衆性を備えており、漫画から発信された図書館像は多少の誇張はあれど“それを受け入れている人々の図書館像を現している”として、漫画というメディアを取り上げる意義を述べている（山口真也, 2000）。山口（2000）の論文では「図書館像」という言葉を使っているが、図書館員像にも同様のことが言えよう。

山口（2000, 2001）は、両論文の調査手法として、1990年以降の『出版年鑑』と『オリコン年鑑』に掲載された漫画単行本売上ベスト10作品の漫画（時代・歴史漫画を除く）を収集した。同時にインターネット上の掲示板で情報提供を呼びかけ、寄せられた情報をもとに書店・古書店・漫画喫茶の在庫から図書館と図書館職員の登場有無を調査した。

山口（2000）は、最も多くのサンプルを得られた館種が学校図書館であったことから、201の漫画作品に登場した学校図書館と学校図書館職員39人について、その職名・業務を分析している。図書館員の業務の結果、「利用者を注意する」「図書委員の指導」「貸出」「利用記録の漏洩」が主であり（山口, 2000）、大半が専門的知識や技術を必要とされない、つまり専門性がほとんど見られないことを明らかにした。

次に2001年には、追加調査により対象館種を公共図書館・大学図書館にも広げ、445作品に登場した136人の図書館員について、図書館員の性別や性格・人物像を分析している。山口（2001）は調査の結果、学校図書館・公共図書館・大学図書館で働く図書館員はいずれも「女性の仕事」として描かれ、人生観は“負のイメージが強い”、特に“メガネをかけ、眉をひそめ、顔をしかめている”という表現方法がある程度確立している”ことを明らかにした。さらに現実の図書館員にもこのイメージが定着することを危惧している。

山口（2000, 2001）の研究は、図書館や図書館員のイメージを詳細に分析したものであったが、図書館員の専門性を検討するものではなかった。学校図書館員の専門性については、専門的業務がほとんど描かれておらず、専門的・倫理的両方の意味で専門性がほとんどどうかがえないという分析結果が紹介されている（山口, 2000）。しかし翌年の研究で山口（2001）は、館種の対象を公共図書館と大学図書館に広げているにも関わらず、館種別の傾向というよりは館種を問わず図書館員の総合的なイメージを考察している。図書館員の専門性がどう描かれたかについては全く触れられることがないまま、表面的なイメージ考察に終わっている。

仁上（2005）は、『情報の科学と技術』の特集で、図書館に対する広報イメージ戦略の必要性とその具体策を論じている。研究背景は、外部委託の増加と専任職員の減少による司書職の専門性の崩壊を危惧していることにある。改善のためには、広報イメージ戦略を通して専門性を訴求するべきだと主張している。

まず仁上（2005）は、1979年から2005年までに放送された図書館員が登場するテレビドラマ6作品から、図書館員に対する偏見を次のように整理している。すなわち、暗く親しみにくい性格で、専門職であるという意識が低く、貸出返却等の定型業務ばかりが描かれ、司書資格が“お手軽な資格”である、という4つの共通イメージである。また、この偏見の原因が図書館員の実態にあることを指摘しており、社会的イメージの問題は、利用者がドラマの映像を見る前から図書館員の実態を見ていることで“そのように「理解」している”ことにあるとしている（仁上, 2005）。最後には、図書館員のイメージ形成のための改善項目を、広報媒体の改善をはじめ計10個挙げている。このように仁上（2005）は専門性の崩壊を危惧しているものの、改善策として、図書館現場における広報活動を強調するのみである。

これらの図書館員のイメージに限定した研究は、司書の重要性は認めているものの、漫画やドラマの分析を通して「司書が専門職であることへの認識」について深く検討するものではなかった。

2.2 専門職の職業像に関する研究

専門職の専門性を高めるために職業像を議論する先行研究として田中（2012, 2016）は、ドラマや漫画に描かれるソーシャルワーカーの職業像を分析している。ソーシャルワーカーという用語は、国家資格がなくとも使用できる名称であるが、この名称の語義には国家資格が必要な社会福祉士も内包されている。

“ソーシャルワーク専門職は、「見えざる専門職」と揶揄されることもあるほど、他の対人援助専門職に比べて、イメージすることが困難な職業である”ことが研究背景にある（田中, 2012）。そのようなソーシャルワーカーの職業像を明らかにすることで、“潜在的福祉ニーズの掘り起し”（田中, 2016）や、当該職業を目指すものの人材確保、さらには専門性を確立させるうえで一助になるとしている（田中, 2012）。一例として田中(2016)は、ソーシャルワーカーを主人公とする漫画を通して、ソーシャルワークの専門的見地から分析し、同職がどのように描かれているかを明らかにする調査を行っている。結果の中で、国家資格である社会福祉士に関する記載がないことと、その養成課程が描かれていないことを指摘し、“確かな専門性と教育期間が必要”な職業であることを読者に示す必要があるとしている（田中, 2016）。

田中（2012, 2016）は一般に広く読まれる漫画において、専門性を持つ職業は正しく描かれるべきであるとしている。このように専門職の職業像に関する議論はされている一方、司書に関する同様の議論は少ない。

以上の先行研究から、専門職の専門性を高めることを目的とした職業像を議論することと、職業像の研究として漫画というメディアを取り上げることの意義があるといえよう。

3. 漫画にみる司書・図書館員の職業像に関する調査

3.1 調査目的

一般社会において司書の専門性とその必要性がどの程度理解されているかを検討するために、本調査は多くの人々が愛読する漫画を通して司書がどのように描かれているかを明らかにすることを目的とした。加えて、一般社会においてその専門性が周知されている医師を主人公とする漫画との比較から、司書の専門性への理解の無さについて明確にすることとした。

3.2 調査方法

3.2.1 調査対象作品の選定

①司書を主人公とする漫画作品の選択

はじめに、図書館員が主人公である漫画を閲覧した。実際に閲覧する作品は、次のように収集した。対象は、2008年から2022年9月までに出版された、図書館が舞台でかつ図書館員が主人公の漫画（コミックス）とした。まず、「めっちゃコミック」、「BookLive」、「コミックシーモア」ほか、計6つの漫画をメインに取り扱っている電子書籍サイトで、図書館または図書館員が登場する漫画作品を探索したところ、180作品見つかった。次に実際に閲覧する漫画を選択するため、以下7つの条件を設け、作品の絞り込みを行った。

- a. 図書館員（雇用形態や資格の有無に関わらず、図書館で働いている人）が主人公であること。
- b. 図書館員が、図書館員としての業務をこなし、働く姿が描かれていること（図書委員やボランティアといった無償労働ではないこと）。
- c. 舞台である図書館が、一般人が利用でき、利用者が存在する図書館（公共図書館や私設図書館、大学図書館）であり、学校図書館（図書室）ではないこと。
- d. アダルト（18歳未満は閲覧できない、またはそれに近い描写が多数ある）作品ではないこと。
- e. 「短編集に収録されているうちの1話」といった、いわゆる「読み切り」ではないこと。
- f. 原著者（原作者）が日本人であること（日本人が抱く図書館員の職業像を調査するため）。

g. 2022年9月時点で、直接入手が可能なこと（在庫なし、取り寄せ不可は除外）。

絞り込みにあたり、条件に合致するかを確認するため、前述のサイト内に投稿されたレビューや通販サイト、書籍レビューサイト「読書メーター」で読者による情報を収集し、作品のあらすじや設定を参照した。

絞り込みの結果、上記7つの条件をすべて満たした作品は9タイトル（計53巻）であった。

②司書を主人公とする漫画の決定

上記の①で選定した9タイトルを、漫画を通して司書がどのように描かれているかを明らかにするという調査目的に沿って、以下の3つの基準をもとに絞り込んだ。すなわち、a. 専門業務を行う描写や、図書館関連用語の解説がある、またはそれらが多いか、b. 図書館員の専門性の高さ、あるいは専門業務を行う描写が顕著にかつ毎話表れているか、c. 図書館員としての誇りや熱意を持って働く場面や発言がみられるか、であった。なお、現在も未完結である作品については、2022年9月末時点で出版されている巻までの内容を選定対象とした。なお、選定対象とした作品の一覧は付録の付表1に、基準を満たしていない順に並べて示した。

この選定により、すべての基準を満たした作品は『夜明けの図書館』のみとなった。なお、この作品は司書による監修が行われている。「カレントアウェアネス」の作者と監修者へのインタビュー記事によると、監修者である司書の吉田氏は“作品について最後に決めるのは作者と編集者であり、私は物語が「嘘」になりそうだったときだけ軌道修正する”立場であったと述べている（埜納・吉田・関西館図書館協力課調査情報係、2021）。このように、図書館の現状を可能な限り反映した同作品は、創作部分から現状を示す場面を切り離しながら分析することができる調査対象であると判断した。

③医師を主人公とする漫画の選定

2008年から2022年9月までに出版された、医師を描いた漫画（コミックス）作品を検索エンジンで探索した。3.2.1の7つの条件のうちc.を除いた条件を医師に置き換えた形で作品の選定を行った。作品の選定にあたっては、司書を主人公とする漫画と同様に、電子書籍サイト内の各作品のあらすじや読者による情報を収集することで内容を参照した。その結果、小児外科医が主人公の『最上の命医』第1巻を対象とした。

3.2.2 調査項目

内容分析を行うにあたり、調査項目として、次の4つの「カテゴリ」を設定した。すなわち、①専門業務、②非専門業務、③図書館員の意識、④図書館・図書館員の現状、である。①と②は、司書資格や知識、経験・研修などの専門性が求められる業務と、専門性が必要とされない業務を区別するために設定した。③を設定した理由は、登場人物である司書や図書館員が、自らの仕事をどのように認識しているかを調べるためである。④は、図書館の現状や図書館員の実情がどの程度反映されているかを調べるために設定した。

3.2.3 調査手法

選定により内容分析の対象となった『夜明けの図書館』を閲覧し、各カテゴリに該当する場面とセリフについて、抽出及び集計を行った。場面やセリフの意図が不明確で、カテゴリ分けが困難と判断した場面は集計の対象から除いた。なお調査における「場面」の定義を、ある場所で行われる一連の動作や会話とした。この「場面」は、一コマのみである場合も複数ページにわたる場合もある。日付や時間帯が変わる、登場人物が別の場所に移動し別の行動をとるといった変化があった場合に、セリフの文脈も考慮しながら場面を区切った。

4つのカテゴリに含まれると判断した場面は、さらに細分類しながら分析を行うこととした。また、その場面に登場した人物に筆者が独自の記号を付与することで識別し、それらの登場人物がどのカテゴリに関係していたかについても記録した。

3.3 調査結果

3.3.1 主カテゴリ別場面の件数

内容分析の結果、合計 532 件の場面及びセリフを抽出することができた。描写が不明確で詳細に描かれておらず、そのセリフや行動の意図の判断が困難である場面、あるいは解釈が異なる可能性が生じる場面は除外し、調査対象外とした。なおこれ以降、場面及びセリフをまとめて「場面」と呼ぶ。

4つの主カテゴリに分けて分析を行った結果を表1に示した。

表1 カテゴリの件数 (n=532)

名称	カテゴリ説明	件数
専門業務	司書資格や経験・研修が必要な業務	301
非専門業務	専門性が求められない業務	162
図書館員の意識	図書館員や司書という職業に対する思いや考え	53
図書館・図書館員の現状	図書館と図書館員の実情の反映	16

全 532 件の場面のうち専門業務は 56.6% (301 場面)、非専門業務は 30.5% (162 場面)、図書館員の意識は 10.0% (53 場面)、図書館・図書館員の現状は 3.0% (16 場面) であった。最も多かったカテゴリは「専門業務」で、全体の半数以上を占めた。一方、「非専門業務」は「専門業務」の約半数であった。

さらに、各主カテゴリに分類する過程において、上記のカテゴリを細分化するサブカテゴリが複数見つかった。すなわち、専門業務は 14 個、非専門業務は 12 個、図書館員の意識は 8 個、図書館・図書館員の現状は 4 個のサブカテゴリに分けられた。

3.3.2 登場人物別件数

次に、主な登場人物が専門業務あるいは非専門業務を行った割合と件数を述べる。作品における主な登場人物は、司書で正規職員である主人公 A、同じく司書で正規職員の B、司書で非正規職員の C、および司書でない市役所の正規職員の図書館員 D、の計 4 名である (付表 2 参照)。これ以降、特定の登場人物について言及する際は A～D の記号を用いて結果を示す。

専門業務全 301 場面のうち、各登場人物が専門業務を行っていた割合は、A は 55.1% (166 場面)、B は 9.6% (29 場面)、C は 8.3% (25 場面)、D は 15.3% (46 場面) であった。非専門業務全 162 場面のうち、それぞれの登場人物が非専門業務を行っていた割合は、A は 56.8% (92 場面)、B・C はともに 5.6% (9 場面)、D は 21.0% (34 場面) であった。

3.3.3 専門業務カテゴリのサブカテゴリと事例

「専門業務」カテゴリのサブカテゴリについて、その件数と事例を表 2 に示した。事例は、各サブカテゴリに分類された場面の中で最もその内容を顕著に表していた場面を 1 つ選んで記載した。なお、表 2 以降での表中の「」内は、作中のセリフを引用した箇所、あるいは作中で使用された用語を表している。

最も多かった専門業務は、レファレンスであった。例として、利用者がカウンターにやってきて「1964 年の新聞かビラで、個人が紹介された記事を探したい (要約)」と司書に話す所から場面が始まる。それに対し司書は、郷土資料や個人が発行した冊子などをあたるが見つからない。そこで司書は、利用者に再度記事についての詳しい情報を聞き出すと、市の広報誌であったことを特定し、最終的に利用者が求めていた資料を提供することができた。ほかにも、レファレンスの場面が専門業務カテゴリ全体の約半数を占めるほど多く掲載されていることが分かった。

次に多かった場面は、他部署連携であった。例として、図書館内で宣伝していた「高校生ビジネスプランコ

ンテスト」に、利用者が参加したい、と司書に話す場面から始まる。司書は、後日利用者に商工会議所の経営指導員を紹介する。司書がビジネスの専門家に繋げることで、利用者は専門的な助言をもらうことができた。

表2 専門業務カテゴリのサブカテゴリと事例 (n=301)

名称	件数	事例（記載の箇所）
レファレンス	161	「1964年の新聞かピラの（特定の）記事」を探している利用者に対し、資料を探し見つけ出す（5巻 p. 34-40）
他部署連携	52	ビジネスプランコンテストへ応募する利用者に商工会議所の経営指導員を紹介（5巻 p. 72-76）
企画	21	ヒューマンライブラリーの企画立案（5巻 p. 154-162）
蔵書点検	12	ハンディスキヤナで資料を読み取り、館内の全ての蔵書を点検（4巻 p. 7-13, 16）
資料作成	12	図書館年報の作成（3巻 p. 93-94）
書架配置替え（整理）	9	別の場所にあった資料を、請求記号に基づき新たな書架に並べ直す（3巻 p. 132）
児童サービス	8	子どもへの絵本の読み聞かせ（4巻 p. 95-97）
ハンディキャップサービス	7	ディスレクシアの疑いがある利用者に「マルチメディアデイジー」を利用させる（4巻 p. 172-173）
不明本搜索	6	蔵書点検により所在不明と判明した資料を探す（4巻 p. 26-29）
乳幼児サービス	5	ブックスタートの実施（7巻 p. 94-95）
修繕	4	濡れた本を給水紙や重石を使って修復する（7巻 p. 88）
ブッカーかけ	2	新着図書に専用のフィルムを貼る（6巻 p. 34）
排架	1	ブックトラックに入った図書を書架に配置する（3巻 p. 11）
データ整理	1	蔵書点検で読み取った書誌データと所蔵データとのマッチング作業（4巻 p. 23）

3.3.4 非専門業務カテゴリのサブカテゴリと事例

「非専門業務」カテゴリのサブカテゴリについて、その件数と事例を表3に示した。専門性を必要としない非専門業務の中にも、多くのサブカテゴリが見つかった。

表3 非専門業務のサブカテゴリと事例 (n=162)

名称	件数	事例（記載の箇所）
利用者対応	104	利用者と（レファレンスとは関連性のない）会話をする（1巻 p. 62-65）
貸出返却	14	貸出または返却手続きをする（1巻 p. 10）
企画	12	怪談会（イベント）の実施（1巻 p. 178-179）
物品・施設管理	10	電灯を交換する（1巻 p. 110）
本の整理	9	本を正しい位置に並べ直す（1巻 p. 131）
事務作業	3	除籍の手続き（1巻 p. 97）
返却本処理	3	休館期間に返却された本の処理（4巻 p. 46）
案内	2	求める資料がある書架まで利用者を案内する（1巻 p. 12）
業務連絡	1	各自の担当業務について連絡する（1巻 p. 9）
延長手続き	1	貸出期間を延長する手続き（1巻 p. 26）
返却催促	1	返却を延滞している利用者で電話で催促する（5巻 p. 18-19）
相互貸借	1	自館にない資料を他館から取り寄せる（4巻 p. 84）
その他	1	「在架」であるはずの資料が見つからず探す（3巻 p. 105-106）

最も多かったのは、104件の利用者対応であった。利用者対応というのは表中の事例で示した通り、専門業務であるレファレンスサービスとは関連性がない会話をするを指している。例えば、図書館内で主人公Aが、以前レファレンスを担当した利用者と再会する場面から始まる。「息子が大人になって家を出たきり全然連絡をしてこない」と愚痴をこぼす利用者には、Aは「連絡がお座りになるのは、親を信頼してちゃんと想っているからです（要約）」と返す。このように、司書資格を持っている主人公Aと利用者が雑談を行う場面が多くを占めており（104件中67件は主人公によるもの）、これはAの性格が「お節介」と設定されていることも関係している。つまり、司書資格を有していても専門業務のみを行うことはなく、むしろ資格の有無に関係なく、時には接客業のような非専門業務を担当している状況を表していると考えられる。

また、物品・施設管理のカテゴリであるが、半数以上は司書資格を持たない市役所の一般行政職員Dによるものであった。この人物は「庶務経理担当」という役割があるが、資格を有していないがゆえ、司書の専門業務とはかけ離れた、表中の例のような雑用業務まで任されていると推測される。

3.3.5 図書館員の意識カテゴリのサブカテゴリと事例

登場人物である図書館員が抱えている仕事への思いや考えを表すカテゴリ「図書館員の意識」は、表4のように細分化された。

表4 図書館員の意識のサブカテゴリと事例 (n=53)

名称	件数	事例（記載の箇所）
自負	24	「私は勉強して資格とって 研修うけて ちゃんと認められてココにいるんです」と怒る (1巻 p. 23-24)
情報サービス機関としての図書館	5	利用者の「“知りたい”って思い」を手助けするのも図書館の仕事である (3巻 p. 89)
きっかけ	4	本と図書館の空間が好きだったから図書館の仕事を目指した (4巻 p. 94)
イメージ	3	「本って自分を励ましてくれる力があると思う」※図書館員は本が好きというイメージと推定 (7巻 p. 152)
サービス業	2	「カウンターは図書館の顔 笑顔でね」(1巻 p. 9)
軽視	1	レファレンスはサービス過剰で時間と労力のムダである (1巻 p. 22-24)
司書資格の必要性	1	通信教育で司書資格を取り始めたと報告する ※無資格者が司書資格の必要性を感じるようになったと推定 (7巻 p. 174)
その他	13	図書館の仕事が素晴らしいと思えない (1巻 p. 111-112)

「自負」は、司書あるいは図書館員として誇りを持っているセリフである。例えば、司書である主人公Aが図書館員Dからレファレンスを軽視され、「私は勉強して資格とって 研修うけて ちゃんと認められてココにいるんです」と言う場面がある。これは、主人公が司書として誇りを強く持っていることを表している。

「情報サービス機関としての図書館」は図書館が情報提供をする場、つまり情報サービス機関であるというメッセージである。表中の事例は図書館員によるセリフであり、これは、図書館は情報を求めている利用者の手助けをする役割があるという認識に繋がっている。

「きっかけ」は図書館員を目指す契機となったエピソード、あるいは図書館員になった直接的な理由を示している。例えば、資格を持つ非正規図書館員Cが、図書館の仕事を目指したのは「本と図書館の空間が好きだったからだ（要約）」という場面があった。これは、図書館員を目指す典型的な理由とも言える。

「イメージ」は、図書館員の仕事に対するイメージを作者がセリフに反映させている場面を表している。例えば、主人公Aが「本って自分を励ましてくれる力があると思う」と、利用者には本が与える力やすばらしさを伝えるセリフがある。これは「図書館員は本好きである」といったイメージに基づくものと考えられる。

「サービス業」は、図書館員として働くうえで、接客業のようなサービス精神が要求されていると推測され

る場面を表している。例えば、カウンター業務を初めて担当する新人の主人公 A に、ベテラン司書 B が「カウンターは図書館の顔 笑顔でね」と呼びかけるセリフがある。この「笑顔でね」というセリフは、図書館では、利用者と図書館員の間で金銭のやり取りは発生しないが、利用者を「お客様」のように扱うべきだというサービス業の精神を表現しているといえよう。

「軽視」は司書の仕事を見下した D によるセリフである。これは、レファレンスサービスという最も重要な専門業務を見下げたセリフであることから、意図的なもの、つまりレファレンスサービスは重要な専門業務であると証明するための暗示とも言える。

「司書資格の必要性」は、司書資格を有しておらず、物語序盤では専門業務を軽視していた図書館員 D が、最終話で「司書資格を取り始めた」と報告する場面を表している。これは、図書館員としての経験を積んでいくうちに専門業務への理解が深まり、司書資格の必要性を感じるようになったと考えられる。

3.3.6 図書館・図書館員の現状のサブカテゴリと事例

図書館の現状と図書館員の実情が反映されたカテゴリ「図書館・図書館員の現状」は、表5のように細分化された。

表5 図書館・図書館員の現状のサブカテゴリと事例 (n=16)

名称	件数	事例 (記載の箇所)
キャリア	8	図書館から市役所本庁の秘書課に異動が決まる (7巻 p. 165-166)
図書館利用	3	ブラウジングする人より目的の本だけ借りていく人が増えた (2巻 p. 61-63)
雇用	2	臨時職員と嘱託職員の契約期間 (4巻 p. 98)
契約職員の契約期限延長なし	1	契約期限を迎える契約職員に次の就職先を紹介 (4巻 p. 130-131)
その他	2	正規図書館員の担当業務 (庶務経理, 資料, 情報サービス) が列挙されている (3巻 p. 95)

表中の「キャリア」は、登場人物の経歴 (学歴や職務経歴, 図書館に就職するまでの経緯や図書館で働いた後の方向性) が分かるセリフや場面とした。例えば、市役所の一般行政職員である図書館員 D が、最終話で本庁の秘書課に異動が決まる場面がある。これは、現実の市役所職員のジョブローテーション制度 (数年に一度、職員の適性に依り配置転換をする制度) を反映させたものであると推測される。

「図書館利用」は、図書館員からみた利用者の図書館の利用の傾向を表したものとした。以前はブラウジング (書架を眺め歩くこと) をする利用者が多かったが、近年は、目的の本だけを借りて帰ってしまう利用者が増えた、と3人の図書館員が話している場面である。

「雇用」は、図書館員の雇用形態に関する事例や実態を反映させたものとした。例えば、臨時職員は1年契約を6回まで (最長6年)、嘱託職員は3年契約を2回まで (最長6年) の雇用、という説明がされている。現実の図書館にも様々な雇用形態の図書館員が存在しているという事実を反映させたものと言えよう。

「契約職員の契約期限延長なし」は、更新回数の限度まで契約更新した契約職員は、期限を迎えるとその図書館で働くことができないことを示した。ここでは正規職員が、契約期限を迎える臨時職員に新しい雇用先を紹介する場面があるが、これは、非正規職員は同じ図書館で長期間働くことができない現状を表している。

3.3.7 医師を主人公とする漫画作品との比較

『最上の命医』1巻の内容分析の結果、合計37件の場面及びセリフを抽出することができた。『夜明けの図書館』と同様、描写が不明確で詳細に描かれておらず、そのセリフや行動の意図の判断ができない (解釈が異なる可能性が生じる) 場面は除外し、調査対象外とした。37件の場面は、3つの主カテゴリに分けられた。すなわち、「専門業務」に該当する「医療行為」の場面が9件、「医師の意識」の場面が13件、「医師の現状」の

場面が9件であった。また、「非専門業務」に該当する場面は、作中で医師が仕事をしている場面が全て専門業務に該当すると判断したため、見つけることができなかった。なお、筆者らは医学を専門としておらず、医師の業務や医療に関する知識が十分でないことから、各場面をサブカテゴリに細分化することは困難と判断し、サブカテゴリ分けは行わなかった。

4. 考察

4.1 司書という職業に対する意識の違い

司書資格の有無の違いは、登場人物の司書に対する意識に大きく影響している。

まず司書資格を持たない正規図書館員Dについて、その意識を反映していた場面とセリフを検討する。Dは物語の序盤で司書の専門業務を見下す人物として描かれている。レファレンスサービスを「いくら行政とはいえサービス過剰」「はっきり言って時間と労力のムダ」と酷評するが、物語が進むにつれ、Dはレファレンスサービスに直接関与する機会を得ることから、最終話では、図書館員の仕事への熱意が書き込まれたノートを主人公に渡す。また同話の終盤では、司書資格を取り始めたことを報告しており、司書としての専門的な業務を司書であるAとともに経験して初めて、司書という専門職の意義を理解する過程が描かれている。

一方、司書資格を持ち、正規職員である主人公Aの意識は上記のDと異なったものとして描かれている。

主人公Aは勤続年数が浅い新人司書であるが、念願が叶い正規職員の司書として働くことができている。そのため、司書としての強い自負を持っており、Dの司書職への批判に対して「私は勉強して 資格とって 研修うけて ちゃんと認められてココにいるんです」と怒りをあらわにする。この場面を中心に、物語では主人公Aの意識（セリフ）を通して、司書という職業に就くためには、専門教育を受けて資格を取得し、正規職員となる試験に合格するためには高い能力と強い意志が必要であると示唆している。この点を読者に伝えようとした『夜明けの図書館』は他の漫画作品とは一線を画す名作と言えよう。しかし、同様の漫画作品がこのほかには出版されていないことから、司書の職業像としてその専門性が周知されていないのが現状である。

4.2 司書と図書館員が混在する図書館の現状

登場人物Cは、司書資格をもちながらも非正規職員として雇用され、正規職員に合格できないまま嘱託職員を続ける図書館員として描かれている。これは公共図書館における雇用形態の現状を的確に表している。

さらに、図書館員であるDが、司書である主人公Aと同じ業務をこなす場面が多く描かれていたが、これは司書の専門性を活かした業務分担が行われていないことを示し、図書館の現場ではさらに専門性が軽んじられていることを反映していることになる。

4.3 社会的地位の高い職業との比較

調査対象の漫画作品において、司書の専門性が認められていないという現状が描かれていることを述べてきた。ここでは、社会的地位が高く、専門性が認められている医師という職業に目を向けてみたい。

司書の描かれ方との相違点として、医師が仕事をしている場面は専門業務がほとんどであり非専門業務が描かれていないことであった。『最上の命医』の主人公は、序盤から困難な手術を短時間で難なく終わらせてしまう場面があり、その他にも圧倒的に医療行為の場面が多かった。医師としての業務と医師以外のスタッフが担当する業務とで明確な区別が行われている医療現場と、司書と図書館員が同じ業務を担当する図書館の現場が異なっているのは、医師と司書の専門性に大きな隔たりがあるためと考えるとよいであろう。人命にかかわる業務を担当する医師の専門性は、漫画作品によって周知させなくとも明白である。一方、先行研究として紹介したソーシャルワーカーの社会福祉士と同様に、司書の果たす役割は理解されにくい。利用者が求める情報を的確に判断しそれに対応する司書は人の命を預かるものではないが、情報は、間接的に人の人生や生命を左右

することもある。とはいえ、漫画という人々に広く愛読される媒体を通して、司書の専門性を示すことは難しいことが証明された。

本研究から、漫画というメディアに限定されるものの、図書館の専門業務を担当するプロフェッショナルとして司書が描かれていないことから、司書の明確な職業像が確立していないことが明らかとなった。

5. 今後の課題

本研究では、専門性が認められていない司書の現状をまず明らかにすることから、本来の図書館司書職の専門性の理解向上に関する議論を進めることを目的とした。本調査の目的は、一般の人々に広く読まれる漫画作品において、司書の専門性が描かれているかを明らかにすることであった。その結果、司書が監修した漫画作品であっても、様々な図書館業務の場面で詳しく描かれていたことは評価できるが、司書の専門性については司書資格や研修の必要性がセリフによって示されたのみで、専門性を知らしめるものではなかった。

図書館の職員には、専門家としての司書と、司書をサポートし事務的作業を行う図書館職員とが共に必要である。しかし図書館現場においては、司書の専門性を活かした人的配置や業務分担は行われていない。漫画においても司書の業務の専門性が十分に描かれなかったのは、そうした現実を反映しているからに他ならない。

今後の課題として、司書職を取り巻く社会的な構造を明らかにするため、現実の司書職にも目を向けるべきである。具体的には図書館法や司書課程「図書館に関する科目」の内容から司書に求められる職務内容や技能を明らかにすることと、図書館員の採用方法・労働条件を実際の雇用データから分析すること、さらに司書職への社会的な認識を他の方法からも調べる必要がある。司書職による専門業務と実際の業務内容との相違など、さまざまな観点からの総合的な分析が待たれる。

最後に、本研究は漫画作品研究とは異なり、図書館情報学の観点から情報メディアとしての漫画の内容を分析し、司書の職業像に関する新たな知見について議論しようとするものであることを書き添えておきたい。調査対象作品の作者への敬意をここに示して、文を締めくくるとする。

引用文献

- 入江謙三・橋口たかし (2008). 最上の命医1 小学館
- 文部科学省 (2020). 社会教育調査／令和3年度(中間報告)統計表 図書館調査 Retrieved from https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?stat_infid=000032218569 (2022年9月25日)
- 文部科学省 (2022). 司書について 文部科学省ホームページ Retrieved from https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/gakugei/shisyo/ (2022年9月25日)
- 日本図書館協会 (2014). 図書館員の倫理要綱 日本図書館協会ホームページ Retrieved from <http://www.jla.or.jp/library/gudeline/tabid/233/Default.aspx> (2022年9月25日)
- 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会 (2020). 図書館情報学会用語辞典 第5版 丸善出版
- 仁上幸治 (2005). 学術情報リテラシー教育における広報イメージ司書職の専門性をどう訴求するかー情報の科学と技術, 55(7), 310-317.
- 埜納タオ (2011-2021). 夜明けの図書館(全7巻) 双葉社
- 埜納タオ・吉田倫子・関西館図書館協力課調査情報係 (2021). マンガ『夜明けの図書館』完結記念インタビュー カレントアウェアネスポータル Retrieved from <https://current.ndl.go.jp/e2347> (2022年9月25日)
- 田中秀和 (2012). 医療ソーシャルワーカーを描いたテレビドラマにおける職業像の研究 新潟医療福祉学会誌, 12(2), 2-7. Retrieved from <http://id.nii.ac.jp/1686/00004017/> (2022年9月25日)
- (2016). 生活保護ケースワーカーを描いた漫画作品における職業像の研究 新潟医療福祉学会誌, 16(1), 67-67. Retrieved from <http://id.nii.ac.jp/1686/00004491/> (2022年9月25日)

- 薬師院はるみ (2016). 専門職論の限界と図書館職員の現状 (特集: この困難な時代にあって図書館は何をすべきか) 図書館界, 68(6), 344-353.
- 山口真也 (2000). 漫画にみる学校図書館と学校図書館職員のイメージ 沖縄国際大学日本語日本文学研究, 5(1), 1-33.
- (2001). 漫画にみる図書館職員の人物像 (1990年代以降) 沖縄国際大学日本語日本文学研究, 5(2), 1-33.

付録

付表1 選定対象とした漫画作品一覧

タイトル	作家名	出版年	図書館員の描かれ方・特徴
『わたしは真夜中』	糸井のぞ	2014-2015	本が好きで「何となく」司書になった。カウンターであくびをする描写が目立ち、暇な仕事だと示唆している。
『ひねくれ司書の未解決事件録』	木梨るなむ	2012	図書館員というより探偵のような役割をしている。名ばかりの「司書」で業務描写はわずか。
『約束は図書館の片隅で』	藤田麻貴	2019-2020	除籍本を管理する大学図書館の分館が舞台。利用者対応がほとんど。
『鞆図書館』	芳崎せいむ	2009-2018	※ファンタジー 鞆の中に図書館があり、主人公が鞆を持ち歩くことで移動図書館のような役割をしている。貸出返却業務がほとんど。
『姉の結婚』	西炯子	2011-2014	仕事ができる図書館員。司書として自治体と連携するが専門性はみられず。
『図書館の大魔術師』	泉光	2018-連載中	※ファンタジー 司書になるための難関な試験があり、高い能力・知識が要求される。
『図書館の主』	篠原ウミハル	2011-2017	児童図書館が舞台。児童文学を扱っており、専門業務は読書案内をするレファレンスが多い。司書課程に少し触れている。
『税金で買った本』	ずいの・系山岡	2021-連載中	図書館員の仕事というよりは、資料保存や図書館運営の実態が主題。
『夜明けの図書館』	埜納タオ	2011-2021	レファレンスサービスが主題で毎話レファレンスの描写あり。図書館員の実態に着目している。

付表2 主要登場人物の司書資格の有無と雇用形態

登場人物	資格の有無	雇用形態	経歴
A	あり	正規	この作品の主人公。新人～勤続2年目。3年の就職浪人（その間書店でアルバイト）を経て正規職員に採用される。
B	あり	正規	勤続13年目の「中堅司書」。情報サービス担当。
C	あり	非正規	勤続3年目の嘱託職員。主に児童書を担当。2年前同館の正規職員枠の試験を受けるが2次試験で不合格。
D	なし	正規	勤続3年目の庶務経理担当。市役所の一般行政職員で旧勤務地は本庁。最終話で本庁の秘書課に異動が決まる。